

日進月歩

西の水平線へ沈みかけた太陽が弱々しく灰色の空を照らしている。暗くなり始めた視界に白い吐息が生まれては消えていく。

茜色の空に満ち始めた夜気は街に夜の到来を告げ、それに応じるように通りの街灯に一つ、また一つと白い光が灯つていく。それはまるで、夕闇に染められた街並みに降り積もる白い粉雪のようにも見えた。

黒と白と赤がそれぞれ三者三様にネオ・ヴェネツィアの夜を象つていく中、暁は小さな紙袋を片手にA R I Aカンパニーへと続く小道を歩いていく。

いいことでもあったのか、見るからに上機嫌で自作の歌などを口ずさんでいる。その右手には小さな紙袋。カチャカチャと小さな音をさせながら、大ききの割にずっしりとした重量感が見た目にも伝わってくる。

カチャッ

少し大きな音が紙袋の中から漏れる。慌てつつ落ち着いて、紙袋をそつと開けると中身に異常がないか確かめる。それは浮き島を出てから、今までに何十回と繰り返した行為。

中には透明な緩衝シートにくるまれた小さな天使のオブジェ。それは空から零れおちる月明かりを浴びうつつらと青白い光を帯びているようにも見えた。

見たところどこも欠けたりしてはいないようだった。暁はホツとする文字通り壊れ物を扱うような手つきでそつと紙袋を閉じる。「全く、あの兄にしては気が効くではないか」

暁の上機嫌の原因となったこの天使のガラスオブジェは、暁の言葉のとおり彼の兄がくれたものだった。彼の記憶が確かなら、兄が自分のおやつを横取りしたり、利子つきで金を貸してくれたりということはあっても、彼に何かをくれたということはついぞない。

と言っても実際のところこんなモノを彼がもらってもまったく使道はなし、かえって置き場所に困るところだったのだが一兄の一言がこの天使たちに素晴らしい役目を与えることになった。

「それなりに上物のガラスオブジェだ。お前がいらないのなら嬢ちゃん達にでもあげてみちやどうだ？」

普段の暁ならこの兄の『嬢ちゃん』という言葉に対してまず「アリシア」を当てはめることはなかっただろうが、運の悪いことに彼は兄の提案に舞い上がり、そんな些細な言い回しなど全く気にしていなかった。

かくして、すれ違う兄弟の思惑をよそに、暁は憧れのアリシアへ恋のキューピットならぬガラスの天使をプレゼントしにA R I Aカンパニーへと向かっているところだった。

数分もたたないうちに見慣れた建物と看板が見えてくる。もう今日の営業は終了しているのだから、2台のゴンドラは棧橋にロープで結び付けられ、テラスには見慣れた後ろ姿が見て取れた。

その少女、水無灯里はこちらには気づかず、机の上においてあるディスプレイの中を感慨深げにじつと見つめていた。

アリシアを呼んでもらい早速このプレゼントを渡そうと思つたが、あまりにも灯里が熱心に見ていたので。興味を惹かれ後ろから画面を覗き込む。

そこにはサンタの格好をした少女と同い年くらいの少年がクリスマスツリーをバックにカメラへ笑顔を向けていた。見たところクリスマスパーティーでのワンシートのようだが、生憎とアクアのクリスマスはまだしばらく先だった。よくよく少女の顔を見てみると、何度か彼自身も大きなイベントで灯里と写真の少女と一緒にいるところを見ていたのを思い出す。

ということはこれはきつと地球（マンホーム）のクリスマスなのだろう。

「ふむ、こっちのクリスマスと違うんだな」

よく見てみれば周りには少女と同じくらいの子供たちの姿が多く